

継続的なソーシャルスキル・トレーニングが学級適応に及ぼす効果 —朝の会・帰りの会を活用したショートプログラムの実践—

○曾山和彦

(名城大学大学院 大学・学校づくり研究科)

【問題と目的】

情報化・スピード化、三間の消失、核家族化など、社会状況の急激な変化により、子どもたちのかかわりの力を育むことが以前に比べれば困難になってきている。それゆえに、対人関係のコツ・技術であるソーシャルスキルも十分には育ちにくい。スキルが乏しく、性格的に強い子どもであれば強いかかわり方ゆえにいじめにつながることもあり、逆に性格的に大人しい子どもであれば自らが学校・学級から離れ、不登校につながることもある。石川ら(2007)は小学校4年から中学校1年の児童生徒に同一の質問紙を用いた調査を行った結果、ソーシャルスキル及び学校適応感は学年が上がるほど低くなるということを明らかにした。今、学校現場では、学級づくり、仲間づくりに活かす技法の一つとしてソーシャルスキル・トレーニング(以下、SST)を活用した実践が増えてきている。一方で、「実践の時間がなかなかとれない」という声も聞こえてくる。そこで、本研究では、朝の会・帰りの会の短時間を活用したSSTのショートプログラムを年間を通して実施した小学校の実践をもとに、児童の学級適応に及ぼす効果検討を行った。

【方法】

対象：公立小学校3年生A学級20名(男子9名、女子11名)。

手続き：毎週火曜日の朝の会で今週のSSTプログラムについて説明。週4日(火～金)、帰りの会15分でSSTを実施。主な演習は「二者択一」、「アドジャン」など短時間でできるものを資料集(國分, 1999)より選定した。

調査時期：2010年5月及び2011年2月。Q-U(河村, 1999)を同一児童に2回実施。所要時間は各15分

測定具：Q-Uの「学級満足度尺度」を用いた。学級満足度尺度は被侵害得点と承認得点の2軸により、児童の学級生活に対する満足度を測定する自己評定式の尺度である。

【結果】

1. Q-U結果；5月から2月にかけての児童の学級満足度の変化をt検定により検討した。その結果、承認得点は17.50から20.65へ(両側検定： $t(19) = 3.54, p < .01$)、被侵害得点は12.05から8.90へ(両側検定： $t(19) = 3.47, p < .01$)とプラスに変容し、共に、統計的には1%有意であることが示された。また、Fig. 1にはA学級児童の得点と全国平均得点を示した。結果からは、2月時点において、A学級児童は全国平均に比

べ、承認感、安心感を高く感じていることが明らかになった。

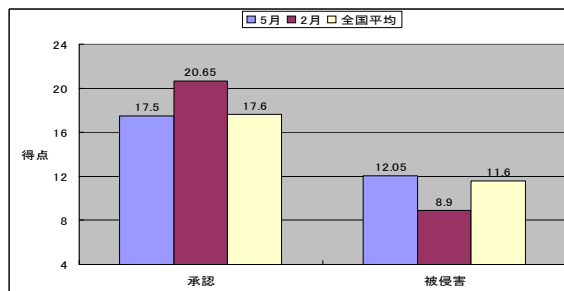


Fig. 1 A学級児童及び全国平均得点(承認、被侵害)

2. 担任による行動観察；「自由に動き回る場面になると、ほとんどの子は、自分からかかわっていくことができるようになってきた」、「帰りの会のグループでは、誰となっても楽しく活動できる姿が見られるようになってきた。休み時間には、男女で混じってバスケットをしている姿も見られるようになった」等。

【考察】

以上のデータ及び行動観察結果から、朝の会・帰りの会の短時間を活用したSST実践は児童の学級適応を促進する効果のあることが示されたのではないかと考えられる。小林(2001)は、「学校・学級におけるSSTのポイント」として、①人づきあいの楽しみ方を学ばせるつもりで指導する、②教え込むような雰囲気ではなく楽しい雰囲気の中で行う、③学ぶ子どもたちにとって楽しくて仕方ないような工夫がなされている、④友だちと一緒に活動する喜びを味わえる、という4点を挙げている。A学級の実践はその4点を含むとともに、さらに実践から、「短時間でできる」、「継続して実施する」という2点を追加提言できるのではないかと考えられる。今後は6点のポイントの検証、新たなポイントの提言を目指し、学校現場におけるSST実践を積み上げていくことを課題としたい。

【参考文献】

- ・石川信一・山下朋子・佐藤正二 2007 児童生徒の社会的スキルに関する縦断的研究 カウンセリング研究 40
- ・河村茂雄 1999 楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U実施・解釈ハンドブック 図書文化社
- ・國分康孝(監) 1999 エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集 図書文化社
- ・小林正幸 2001 学級再生

